

曹 蘭 谷・著 若 松 實・譯

奉使日本時間見録

江戸時代第十次（寛延元年）朝鮮通信使の記録

日が斯く浪費しても、また財物が尽き人力が尽きる嘆き無し、同じく関白の藏入地である。此処から中官・下官は皆供給する日が無い。

二日（乙酉） 遅くに晴れた。

日が高くなってから出発した。永井近江守が杉重を送り支站官が江戸の命で鮮魚と酒を呈上した。一里余り進むと、小船十数隻が小旗を挿して水が浅い所に点点と留まって、前路を指示した。

淀浦に至ると、金鏤の諸船が順次来て留まり、日が晝樓を照らし風が彩色した帳を巻き上げて、見るに正しく此れは高台の観覧席である。

淀浦は山城州に属し、州域は河に臨み、城壁上に低い垣を設けず行閣・板壁を巡らし、白い土を新たに塗って、所々に穴を開けたのは我が国の城の構造の如くである。三―四層の望樓が所々に聳えていて、湖水を引き入れて城を取り巻いており広さが百余歩である。

城外に水車二基を設置して水を引いて城に入れており、其の状景は糸繰り車の如くで、高さは数丈で、此れを湖中に垂れ下げて波に従って独りで回る。其の輪の棧は凡てで十六であり、棧毎に小桶を付けて輪が回る時に桶が水を入れて輪に従って上がって行き自ずと傾いて城の穴に注ぐが、木を削り貫いて作った桶が見た目に甚だ奇異である。

国書を奉じて上陸したが、此処からは船を捨てて陸路を進む。大きな橋を渡ると此処が正しく駅亭であり、州城と相對して甚だ景勝の地である。館所内の諸道具は凡てが水路で通って来た站到けると同じであるが、正使の館所に絵を描いた一瓶に蘭と菊花が生けられており、皆最盛期の如くで、誠に奇異なる見物である。其の州の太守稲葉丹後守が

人を送って慰問して杉重を呈上したが、姓名は越正甫であり、食祿は一萬三千石であると言う。

前人の日記を参照するに、対馬島の人が此処に至ると待機した馬に先ず其の荷物を運ばせ、使臣一行の人馬は不足する虞れが有ると言う。

午後に島主は先に出発したが、一行に準備された騎馬・荷物馬は果たして前の如き弊害が有るので、三使臣が命じて行具を徹して出発しない意を示すと、対馬島の裁判達が慌て走り回って足りない数を捻り出し、三使臣が初めて出発するようにした。

此処から倭京までは三里で、即ち倭皇が居る所であり西京と呼ぶ。三使臣と員役は例によつて道袍と帽子を着けて城に入ろうとしたが前例を見ると其のようである。遂に着替えて進んだが、三里の間は道を均して平坦であり奇麗なことが砥石のようで一片の瀬戸物の欠けら繩の切れ端の塵も残つてはいない。

左右に竹の欄干を新たに作つて置いて見物人が並列する境界と為し、また人家が稍まばらな所は栈敷を設けて上がつて見物する者がまた続いており、時々稲田が有つて新芽が芽生えていた。溝は水が深く、小船が海に通行して、時に村の中での緑陰の下に船を留めており、また一つの景色である。

此の地で初めて車を見たが構造が左程精巧でない。一行が乗る馬は大阪で準備して差し出したと言うが、馬の大きさと従人の数と鞍の諸具の奢侈なことには皆上等・下等の区別が有つて、上等の馬の従人は引く者を合せて十名であり、皆黒色の絹の衣服を着用し、中等の馬の従人は七名で粗布または木綿の衣服を着用し、裸足に脚絆を纏った。持っている雨傘・雨衣・燭籠・大唐傘・大燈籠の類いもまた等級が有る。荷物を積載する馬は青い風呂敷で腹を巻き、荷物を載せる鞍も金色で飾つて、赤い絹で鞍下の敷物を作つてあつて甚だ厚い。

僅かに一里進むと日が既に暮れた。暗くならない前に堤燈を持って随行する日本人が既

に火を点し、大・小の堤燈を持って暗くなって出迎えに出た者も無数である。我が国の人と護行する日本人が一路に互いに連なっているのが殆ど三―四里にも亘っていて、家の両側の家々が皆燈燭を設け、一行の燈燭も列を為して立っており、皓皓として長い道に毛や毛髪までも数えられる程である。

市門二十五箇所を通って館所に着くと、館所は即ち所謂本長寺である。人物の繁盛して服飾が奇異なることが大阪に比べて倍を越しておるが、楼臺の景勝は稍劣るようである。道の傍らに五層の楼閣が空中に遙かに高く聳えているが此れは東寺と言う。

館所に入って暫く休むと、馬州守と両長老が謁見を請い、主客が皆公服の装いで会った。馬州守が先ず旅行が平穩であったことを慰勞してから言うには、

「江戸の執政が使臣の使行が無事に上陸されたことを祝賀するとの書を送って来ました。此れは東武（江戸幕府）の消息なのでお知らせ申し上げます」

とあったので、三使臣が回答して謝礼した。蔘茶礼を行ってから終えた。

牧野備後守源貞通は食祿が八萬石であり、西京尹は（京都所司代）として此処に在って例によって相見した。三使臣が公服で迎えて会ったが、儀節は馬州守に会った時と同じである。西京尹が黒い公服を着用し角帽一つを頂き長い長袴を引いて入って来たが、体裁が稍整っていた。馬州守が冠服を着替えて楹内に伏して我が訳官と同じ隊列で中間に入って言葉を伝えたが、頭を垂れて恭しく慎み、出入りするのにも脇門によった。西京尹が「我が国に大いなる慶事が有って通信使が遠路來駕されて御苦勞をお掛けした」と慰勞するので、三使臣が慣例に従って謝礼し、また蔘茶礼を行って終えた。西京尹は本来世襲の職でなく、諸太守の中から厳しく選り抜かれた職位が執政と同じなので、出入りの時には馬州守と両長老が皆庭の下で甚だ恭しく出迎えて見送りをすると言う。

松平美濃守源信卿は食祿が十五萬一千二百三十石で館伴として入来して接見した。容貌が端正で清らかで行動が恭しいが、年令が稍若くて周旋する際に儀節に失策が多いので、

対馬島奉行が傍らで教え導いて慣例に倣って行動をする。蔘茶礼を行って終えた。

西京尹と館伴から皆呈上する品物が有った。菓品と單子の形式は前例と同じである。館伴が呈上した品物の中の所謂「篠粽」(粽)は我が国の正月の時に食べる切った白餅に似ており竹の葉で包んであつて、日本の美味しい食べ物と言われているが甚だ可笑しい。

当地の町奉行が謁見のため入来したが退出してから宴饗に招請した。食べ物・花床と杯を勧める数は大阪に於けると同じである。終わってから宿所に戻って来ると一番鶏が既に鳴いた。

此の日は三里進んだ。

三日(丙戌) 曇。朝遅くなってから起きた。

館舎の大きさとしては道中で第一であり、並べ置かれた凡ての諸具が皆華麗である。朝食後に、正使・副使と共に館所内の諸所を普く回って皆長廊で巡察したが間区の数が幾千間なのか分からない。或る箇所の際に至ると、其れを北園と称し、清い小川一筋がさらさらと庭先を貫いて通りすぎ奇異なる岩と怪しげな形の石が小川の辺りに此処彼処に散らばって峙っていた。魚と鼈が其の間で泳いでおり、香しい深緑樹が垣のように取り巻いて立って珍奇な樹木が陰を連ねていて、境界が清雅で奥深く、決して市街地の中には有りえないような所である。

遅くなってから出発した。幾多の市門を過ぎて大きな橋一つを渡った。左右の欄干の柱に皆青銅で作った擬宝珠が被せてあつて、大きさが一抱えはあつた。角町の里門には取り締まりの禁徒が居り、また手に環のぶら下がった鉄杖を持つて道の左右に立った人が居て、使臣の行列が来るようになると、杖を地に引き摺って「じゃらんじゃらん」と音を立てて前導して行くが、此れは人々を警戒して取り締まる意である。一里余り通りすぎて小さな峠を越えた。左右の村の家は皆茅で葺いてあるが同じく甚だ高く大きく精巧で奢侈な

ことが我が国の草屋に比べて甚だ異なる。
農業に従事する日本人が最も貧しい百姓であると言うも住む家はまた皆斯くの如くである。

大津村の入り口を入って行くと、人家のたたずまいがまた繁華であった。館所に至ると、紫色の帳と赤い毛氈が華奢なことは前の如くであり、庭の花と臺石の竹が瀟洒で愛すべきである。縁側に銅器が置かれており、其の左右に竜の頭を作って置き頭の上には鬘が有って、其の鬘を少し抜くと竜の口から水が噴き出し、其の鬘を差し込むと前の如く水を隠すが、恐らく其の作ったのが甚だ巧妙なのである。

支站官因幡守から食料品の提供が有ったので、下人達と日本人の駕籠舁きに分け与えた。通過して来た大きな村と官衙の所在地には必ず金屏風と彩色した帳を張り巡らした禁徒廳が有って、十余人が手を集めて列を作って跪いて座っていて、使臣一行が通過するのを見れば、下りて来て地に跪いて座る者もあり、下りて来ない者もあるが、前に槍竿の類いを立て後ろに火繩銃と弓・矢を並べ置いたのは水路で站を過ぎる時から陸路にまで皆其のようである。

見物する仕方は老人が後ろに座り、幼児が前に座り俯伏する者も居り跪いて座る者も居た。盖し、彼等の風俗が跪いて座ることを良くするのは幼児達までも其のようであり、此れは外貌を飾るのではない。彼等男女が皆袴下を着用しないので下半身が露出し易いので、跪いて座って隠すためなのである。

三使臣が乗る駕籠の駕籠舁きは各々二十名と定まっております、大阪から江戸まで百五十里の間に途中で交替することは無い。

聞けば、彼等は雇用された人夫であり、各站で其の賃金を調べて支給すると言う。三使臣一行の駕籠舁きは各々異なった模様の衣服を着用した。背が高く壯健な者達が十歩を越えずして出たり入ったりして交替して担ぎ少しも押し付ける気配が無いが、交替して担げ

昼食を取ってから出発したが、雨が一粒も降らなくなってから既に十五日に近くなった。此の国では川の間には水気が常に溢れ小さい日照りには旱災にならぬが、遙かに我が国を思うと、雨や日照りがどのようなか分からず万里の外でまた憂慮せざるを得ない。

此処で初めて桃を見て蟬の声を聞いたが、其の声は我が国の晩秋の蟬の声のようであった。農業の様子は、区画した田地に植えた早稲は既に穂が出たのも有り時偶新しく田植えをするのも有った。

日が落ちる時に守山館所に入った。馬州守・長老が皆使者を送って安否を尋ねた。西京尹及び館伴・宿坊等の所に送る礼物を首訳一人をして馬州奉行と共に此処に来て先に送ったが前例である。

二十七日（庚辰） 晴。午後俄か雨。

日が出る時に出発し大萱に至り休む板屋に入ったが、即ち来る時に立ち寄った所であり、宴会の設備の幔幕の華麗で奢侈なことが歴路の中で主人をした膳所が一番であった。太守康桓が奉行を送り安否を尋ね絶句一首を寄せて、

湖上城東一小亭 湖上城東の一小亭

玉珂此処暫將停 使臣一行が此処に暫く留まらんとす

勸君今日莫辞醉 君に勧める今日酔うを辞する勿れ

萬里清風従北溟 萬里の清風北海から来る

と言ひ、また小紙に、「夕照に酒三壺、拙い詩一枚三使相の座下に謹呈し寸情を述べらる」と書き、また小さい箱に生子・鶏卵・椎茸を詰めて呈上したが即ち酒肴である。沿路の太守達の所謂良く接待するというのはたとえ皆杉重・酒の呈上が有ったとは言え、今此

の膳所の太守は途中で出迎える礼節が良く詩人風流人の風采と態度が有つて頗る人をして喜ばせる。而して辛卯年の日記を参考して見ると、太守康桓の祖父は辛卯年使行の時西京館伴として、使行が膳所を通過する時に迎えて文酒の集まりを作つたと言うが、今彼の孫がまた前の事を継承するが一層珍しい事である。即席で各々其の韻に次韻して奉行の便に送つて厚意に感謝した。

大津に至り館所に入った。因幡守が親しく来て安否を尋ねまた例による食料品の呈上も有つた。

昼食を取つてから出発し一里そこそこ行くと俄か雨が降つたが、塵が湿る程度降つて止んだ。西京の境界に入つて来ると地勢の懷抱広濶と山の氣の雄厚奇壯なことが江戸と通つて来た各州に比べると及ぶべき程の所が無く、入れ墨する郷とは言え皇帝と称する者の居住する所になつて当然である。人物の明秀さとか衣服の華麗なことが江戸に比較して果たして優れた点がある。

路上に禁徒の類いが庁を下りて来て俯伏して可なり法度が有つた。道で見るに、裸の男が続いて急いで走つて行くが「御飛脚」と書いた木牌を持っており、其れは各村から使行が通過した事由を官府に急報する者であると言う。

日が落ちる時に館所に到着した。接待する諸具は前と変わりはないが、赤い漆を塗つた椅子一脚を各々設置してあつたが行く時には無かつた事である。西京尹が使者を送つて安否を尋ね、「途中でも二度も使者を送つて出迎えた」と言つたが、使行が来る時に一度も会わなかつたが奇つ怪な事である。

館伴美濃守が使者を送つて安否を尋ねるので謝礼の意を表し、次いで三使臣が醒井の茶屋に立ち寄つた時に詩を送り付けた。

西京尹がまた使者を送つて安否を尋ね食料品の呈上も有つた。備後守がまた饅頭を呈上したが、箇数が甚だ多いので行中に普く分け与えた。美濃守がまた真桑瓜を送つて来たが